

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 38 号

平成 17 年 6 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

新渡戸稲造「一日一言」より (5)

10 月 14 日

腹の立つのも道理(もつとも)な理由があろう。理由なしに腹たつは、狂気の沙汰。理由ある時腹立つは通常人のなすこと。理由があっても腹立てぬこそ非凡の人。

いかりをばしづむる時は世の海の
浪風とてもしとはざりけり
心には怒り喜びあるとて
深くたしなみ色にだすな

10 月 18 日

気が弱ければ事はならぬ。胆は強く且つ大きく持てば大概の事には屈しない。百の鬼ども襲うとも、何これしきの事と睨(にら)めば、鬼は案外弱いもの。こちらが弱みを見せればこそ、図に乗り込むが鬼どもの戦略。

気は強く固く決心欲薄く
こころは細く胆は太かれ

10月19日

金と塵(ちり)とは、積もれば積もるほど穢(きた)なしとはいいいながら、日ごろ貯蓄なきを潔白と取り違えてはならぬ。いったん貧に迫りて人に合力を乞う時の乞食心の穢なさを思うべし。己のみ金遣いよしなどと誇りながら、子孫をして他人の厄介者にするは、個人主義の最もはなはだしきもの。

我一人いさぎよき身と誇りはて
のこる妻子を乞食とぞする

10月21日

西暦1805年の今日、英国將軍ネルソンが戦死する間に、「予は予の義務を尽くせり」と叫んだ。際限なきは勤めなり。一つ済むと思えばまた一つ。それを果せばまた新たに起こる。かく、勤めは無
限数なれども、ありがたき事には、幾つもある勤めが同時には来ぬ。ゆえにひとつづつ尽くして行けば、たくさん余りありとも、天も人も己も責めぬ。

勤めてもなほ勤めても勤めても
勤めたらぬは勤めなりけり

10月24日

忘れやすきは人の恩。我が人のためにしたことは、一つを十にも計上するが、人のわがためにすることは、十あっても、一つとしか数えぬゆえに、人の薄情を怨(うら)みて、己の薄情に気が付かぬ。

世の中に人の恩をば恩として
我がする恩は恩と思ふな

10月27日

山の如く積もる勤務は多くとも、一年間の用を一日に遂げるぐる力もなければその必要もなし。人はただ、その日その日の義務を完了することにて足る。一日の業は百年の基礎をもつくるべし、一粒の米に万石の約束あるがごとし。

さしあたる事より外を思ふなよ
これを思ひの位とは言ふ
今日を限り今日を限りの命ぞと
思ひて今日の勤めをせよ

10月30日

明治23年の今日は教育勅語を賜りし日。

学校を出れば、勅語を拝読し拝聴する機会（おり）も少なくなるが、老若男女を問わず、国民たるものは時々拝読して、

父母ニ考ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信ジ恭儉己レヲ持シ博愛
衆ニ及ボシ学ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓発シ徳器ヲ成就シ進デ
公益ヲ広メ世務ヲ開キ常ニ国憲ヲ重ジ国法ニ遵ヒ
と仰せられた聖旨を日常服膺（ふくよう）したきものなり。

11月3日

腹が立ったときの顔はいかに醜を極むるかを思え。我が怒りを恐るる女子供を見て、我に威厳ありなどと思わば誤りのはなはだしきもの。顔色面相狂犬に似ればこそ、人は一時避けるなれ、恐縮すると思ふは自惚（うぬぼれ）。

限りなき腹立つことの有りとて
色にもらして声高うすな

1 1月5日

菊は思い思いといわんか、先祖伝来といわんか、いずれにしても種々の色や形を競うて咲くが、互に争う様子はない。各自の考えや趣味が違っても何の争う理由があろう。真面目に正直なれば必ず共通の点を見出すべし。

さまざまの色をつくして咲く菊も
かをりは一つ庭の秋月

1 1月6日

収入が少ない、俸給が上らぬ、世の不景気と列べ立てて貧乏竈(かまど)を嘆くよりも、要らぬ費(ついえ)を省き、見えを張ることを廃(や)め、よからぬ附合を断るべし。出道を約(つ)めれば入り口は広がるん。

貧乏の元手となるは色と酒
家業不精に欲とおごりと

1 1月7日

口は禍(わざわい)の門とは古よりの金言なれど、これを忘れぬ人はない。よし身を犠牲にするも、自己の確信なら述ぶるを憚(はばか)るべからず。確信にもあらざる言、殊に他人の身上にかかわる言は容易に口外すべからず。

湧きかへる胸に剣をおしあてて 言ひたきことをしばし止めよ
かりそめの言の葉草に風立ちて 露のこの身のおき所なき

11月14日

自分の職務を軽く見るは、職務の重きを弁（わきま）えぬ故なり。世には高く大なる職務も数多あらんなれど、自分にとりては、自分の職務より重きはなし。一家のみ治むる婦人も、一室を掃除する下女も、一局部に働く傭人（ようじん）も、小僧も、丁稚（でっち）も、各自の務めに忠なるは君に対する忠となる。

後龜山天皇御製

集めては国の光となりやせむわが窓てらす夜半の蛩は

御柏原天皇御製

卑しきも我に勝りて送る日をなす業なくば身を如何にせん

11月15日

絶体絶命、不幸は長くうちつづき、心も身をもからし尽くし、逃げ場も隠れ家もなしと人生に望みを失える時、心静かに天を仰ぎ、あるいは落ち着きて心に念ずることあらば、いずこと知らぬ所より慰めの吹き来るは何であろう。

霜枯れと見しも恵の露を得て

緑にかへる庭の若草

11月17日

立身の見込みつきかけたる時は、人生の最も危うき時なり。月給の昇り初めは驕（おご）り癖の萌（きざ）す時。名の公に聞こえ出す頃は慢心の発する時。人が賞める頃は心の怠り初める時。時候の変りめにはとかく風引きがち。

世渡りは浪の上行く船なれや

追風（おいて）よきとて心ゆるぶな

11月19日

学問は、奥の奥まで研究するがよし。されど、身を修むる法、心の持ち方などは、ひたすら実行すべきもので、研究に日を費やすべきものでない。知らんと欲せばまず行ふべし。理を究めて後に行わんとせば、百年ありても千年ありても不足なるべし。

月見んと思ふ山路を登りつつ

迷ふ麓（ふもと）に夜はあけにけり

11月20日

暗き世もやがては明ける。雨も一時。人の困窮も永久のものでない。ただし、日が昇りても目を閉ずれば暗夜同様、空が晴れても濡れ衣（ぎぬ）を身につけておれば雨天同然。暗きを恐れぬ者、雨に負けぬ者は永遠日光に浴す。

ふりつもる雪にたゆまぬ松が枝の

心づよくも春を待つかな

11月22日

世とともに和するはよけれども、これも世の習い、あれも社会の風潮なりと、心の中で疚（やま）しく思うことまで世に従わば、世は果てしなく弱みに付け込んで奴隷となし果つべし。

かばかりのことは浮世の習ひぞとゆるす心のはてぞかなしき

おのづから角（かど）一つあれ人心あまり丸きはころびやすきに

11月27日

親しみいかほど深くとも、朋友には朋友に対する礼譲がある。親しみに乗じて礼を欠くは、良友を失うの憾(うら)みとなる。親子夫婦の間にも尊敬の心得なかるべからず。

なれなれていかに親しき中とて
心は常に礼儀忘るな

11月29日

西暦1528年の今日、シナの王陽明が死んだ。王陽明は、良知の道を説いて余すところがなかった。親も子も夫も妻も去りて、ただ一人退いてわが心と交わるは、時も金も要せずして、得る事多き嗜(たしな)みなり。毎日5分間あれば事足るべし。独を咎(とが)め独を改め、独を斉(ととの)え独を慎むべし。

独(ひとり)すむ心の月を詠(なが)むれば
世の浮雲は目にもかからず
身の科(とが)を己がところに知られては
罪の報を如何でのがれん

11月30日

三度食う飯さえ硬し軟かし、特製の品さえ注文通りには行かぬ。物事は一つとして己が望みどおりに運ばぬ。どんな大河も、進む間には、泰山にさえぎられ、己が欲するままに流れえぬ。避くべからざる事情に対して争う武器はない。大河は山麓をめぐり、小舟は蘆間を漕ぐより外に進む道なし。

明治天皇御製

何事も思ふがままにならざるが
かへりて人の身のためにこそ